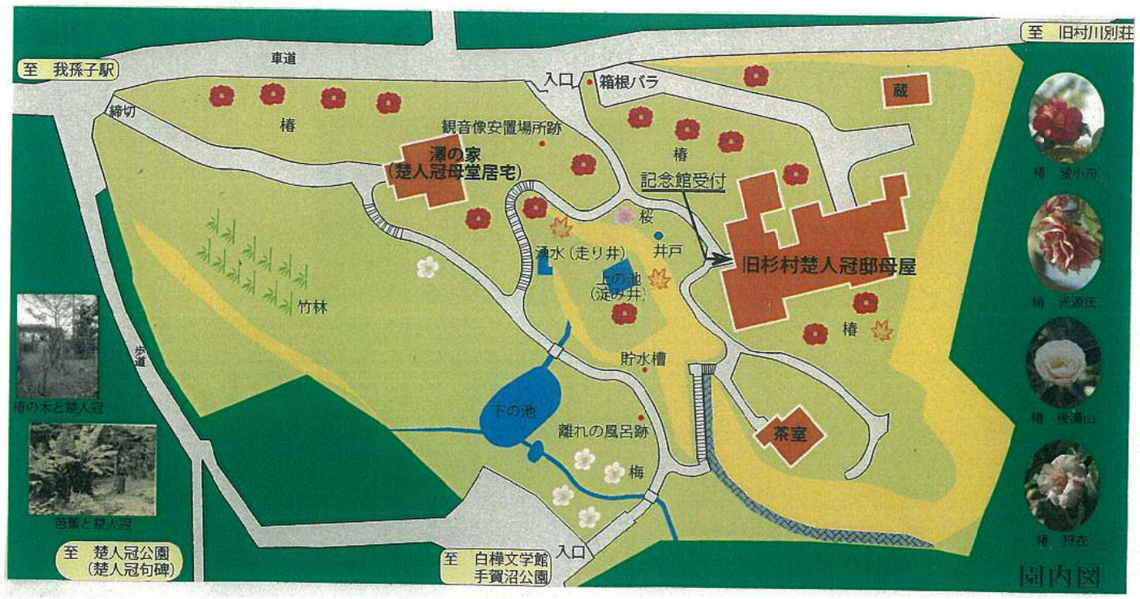
杉村楚人冠記念館

《旧杉村楚人冠邸園》

竹林、椿、池などが残る庭があります。当時はもっとうっそうと樹木が戍る庭だったようです。
楚人冠は自分の庭と邸宅を「白馬城」と名付けていました。
池と水路はすべて湧き水を利用しており、楚人冠は下の池近くにこの水を引いて風呂を楽しでいました。
楚人冠は数ある庭木の中でも、特に椿を愛しました。

地図↓

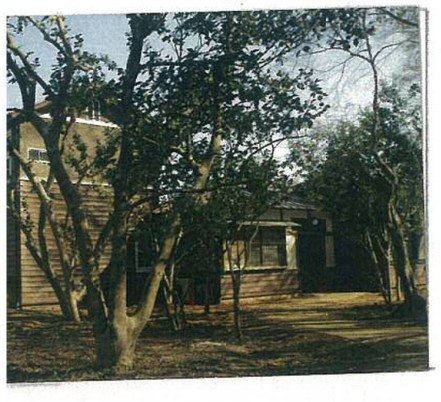


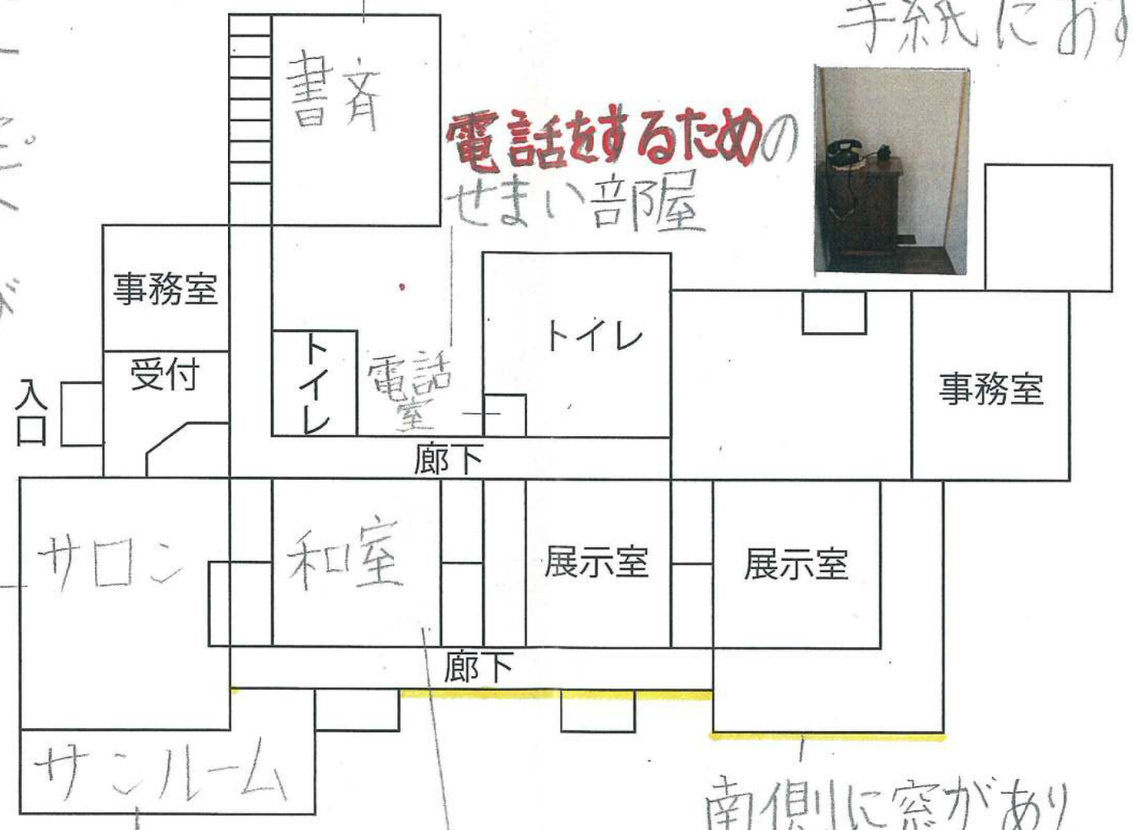
《杉村楚人冠について》

明治末期から照和初期にかけて日本の新聞界で大活躍した、**新聞記者**です。
楚人冠は、新聞や雑誌の執筆、編集、英語教師、通訳などの仕事をしていたため、その語学力を買われ、31歳の時、**東京朝日新聞社**(現朝日新聞社)にたのまれて、入社した。
その後の関東大震災のため、住んでいた東京・大森をはなれ、我孫子に移り住みました。
ここで名エッセイ集「湖畔吟」や、手賀沼の風物を「アサヒグラフ」で我孫子を紹介して、有名になった。

杉村楚人冠邸母屋

当時、建築界の異端児と目された下田菊太郎によって設計されました。
1924(大正13年)にここへ楚人冠は移住した。
しかし、下田の建築に不満を持った楚人冠はたびたび改築を行い、さらに楚人冠の没後にも増築が行われています。





読書や日記、手紙を書くのにつかった本が沢山ある部屋

刻印
手紙におす物。

電話をするためのせまい部屋

お客さんが集まる洋室

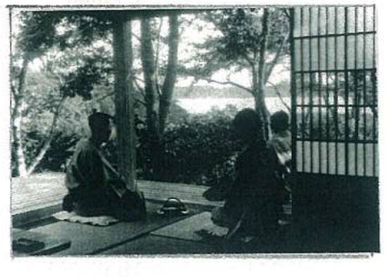
太陽が当たる部屋

南側に窓があり、廊下は日が当たり明るい。
手賀沼も見えた。

かけじくのための床の間とよばれる場所がある。
お茶をつくる炉とよばれる穴がある

〈地震から守る〉

この杉村楚人冠邸母屋にはいくつかの地震対策があります。

1. 書斉やサロンの本だながかべにつけてたおれないようにした。
2. 台所の食器だけをかべにつけている
3. 和室の押入の中のたんすはすべてかべにつけている。

以上